

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370481

研究課題名(和文) 中国における言語特徴の地理的分布に関する研究

研究課題名(英文) A study on the geographic distribution of linguistic characteristics in China

研究代表者

更科 慎一 (Sarashina, Shinichi)

山口大学・東アジア研究科・准教授

研究者番号：00379918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：中国は多言語国家であり、圧倒的に多くの話し手をもつ中国語(漢語)の周囲に、一説に300種弱とも言われる漢語以外の言語が話されている。こうした状況は古くから徐々に形成されてきたものである。本研究では、言語接触の観点から、明代に約500年前に編集され、中国とその周囲の諸言語の発音を漢字音訳によって記した『華夷訳語』と呼ばれる一連の辞書を扱う。資料の分析を通じ、中国の周囲に当時話されていた諸言語と中国語との間の発音上の差異を浮き彫りにし、同時に、非漢語と漢語方言の間の言語地理的な対応関係を明らかにすることを試みた。

研究成果の概要(英文)：Despite the overwhelmingly many speakers of Chinese, there have been spoken many other languages in China. Around the Chinese-speaking area, nearly 300 non-Chinese languages are spoken. In fact, This situation has been continued since ancient times, and has been formed gradually. The present study, from the standpoint of language contact, deals with a series of Sino-foreign dictionaries named "hua-yi yi-yu", which were edited in 500 years ago in Ming Dynasty and contain phonological transliterations of the foreign languages using Chinese Characters. The analysis of the material enables us to demonstrate the phonological characteristics of the languages which were spoken in China and neighbouring areas at that time, indicating their difference from the Chinese phonology. At the same time, the present study also tries to clarify the geographic correspondence between non-Chinese languages and the neighbouring Chinese dialects in their phonology.

研究分野：中国語学

キーワード：言語接触学 言語特徴 中国 言語類型

### 1. 研究開始当初の背景

(1)研究当初は、本研究代表者による平成 24 年度 若手研究(B)「地理情報システムを用いた中国の諸言語に関する言語類型地理論的研究」(課題番号 22720157)を受け、現代中国の諸言語に見られる言語類型論的分布様相が、歴史的にどのように形成されてきたかを解明することが課題となった。

(2)同時に、上述の研究を進めていく過程において、中国において特に言語接触上興味のある地域が特定されてきたので、より突っ込んだ現地調査を通じ、現代中国における言語接触の進行状況を把握することも目標の一つとなった。

### 2. 研究の目的

(1)中国の諸言語の地域的特徴の記述。中国の諸言語に存在するさまざまな地域的特徴を、少なくとも音声面についてはできうる限り網羅的に挙げ、その一つ一つについて、言語接触の立場から説明できるものとそうでないものとに分けて、当該の地域特徴の成立過程を論じることを試みる。

(2)中国西北部に話される諸言語の音声的特徴の記述。この地域は、漢語と、典型的性格が漢語とは非常に異なる複数の少数民族言語(チベット語、チュルク諸語、モンゴル諸語)とが接触している点において、広大な中国の中でも特に注目される地域であるため、特別に取り上げる。

(3)中国における言語接触史の記述。歴代の史書に見られる中国の多言語状況及び外来語に関する記載と、中国における異言語に対する学習・研究の歴史を概観して、中国における言語接触の歴史を明らかにすることにより、現代中国の諸言語の分布の歴史的背景の解釈に役立てる。

(4)中国の諸言語の音韻体系の類型論的分類。現代中国の諸言語は、漢語という巨大言語を中心に、その周辺地域を系統を異にするさまざまな少数民族言語が取り巻くように分布し、漢語と少数民族語は、長く、複雑な影響関係の歴史をもち、漢語方言同士においても同様の相互影響関係が見られる。本研究は、こうした言語接触の歴史を踏まえ、音韻体系を素材として、漢語と非漢語を含めた中国全土の諸言語の類型論的分類を行い、言語特徴の地理的変移の実態を詳細に描き出すことを目指す。

### 3. 研究の方法

(1)フィールド調査。中国西北地方に赴き、当該地域の諸言語の話者と接触し、言語使用実態に関するインタビュー及び言語音声資料の入手を行う。

(2)中国の言語接触に関する歴史文献資料の収集・閲覧・分析。本研究では、漢語と他の言語との対訳の体裁をとる辞書類を題材に、所蔵調査や体裁の比較を行い、中国人による異言語研究の歴史を概観する。本研究では、明清代に編纂された多言語学習書『華夷訳語』及びそれと深い関係を有する『元朝秘史』に的を絞って、そこに用いられた異言語音に対する漢字表記において、非漢語から漢語への音韻体系の移し替えがどのように実現されているかを観察することを通じて、中国とその周辺の諸言語の音韻体系の差異、及び音韻体系の地理的変異の分布様相を明らかにする。

### 4. 研究成果

(1)フィールド調査。研究代表者は、平成 25、26 両年に中国に赴いた。25 年の調査で、青海省同仁県において、当地の数か村で話される接触型言語「五屯話」の話者 2 名と接触し、五屯話の現況について、及び簡単な会話文のサンプルを話者から直接聞くことができた。調査により、五屯話の話者が、中国政府の識別では土族(モンゴル系)とされるにも関わらず、自身はチベット族としてのアイデンティティを持っていることや、この言語が基本的に漢語とチベット語の混合言語であることなど、先行研究の記載が確認できたほか、五屯の村の暮らし向きが青海省全体でもかなりよい上に、五屯話が子供世代にも伝承されていることなどを知りえた。翌 26 年に再び同地を訪れたが、25 年に接触し得た五屯話の話者と会うことができなかった。急遽他の話者を探すことを試みたものの、結局それ以上のフィールド調査はできず、北京の国家図書館において、五屯話をはじめとする中国西北地区の諸言語に関する学術論文を入手するにとどまった。

(2)『八百館訳語』に関する研究。研究代表者は、平成 25 年 12 月 7 日から 11 日まで中国北京市の中国社会科学院民族学与人類学研究所において開催された「『華夷訳語』と西夏文字コードに関する国際学術シンポジウム」に出席し、「『八百館訳語』の音訳漢字の声調について」と題する研究発表を中国語で行った。『八百館訳語』は、中国明代において海外からの使節団の接待や外交文書の翻訳の業務に携わる人員を養成する目的で朝廷が作成した外国語学習書『華夷訳語』の一部をなすものであり、現在のラオスで話されているラオ語、タイのチェンマイで話されるチェンマイ語、現在の中国雲南省等の地に話される「タイ・ルー語」などに近いタイ系言語である「八百語」が、固有の文字と共に漢字音訳によって表記されている。研究発表においては、『八百館訳語』で八百語音を表記している漢字の声調(音節ごとに定まっている高低アクセント)が、八百語のどの声調と対応しているかを調べ、その関係を統計した上、

研究代表者がすでに行った『百夷館訳語』(同じく『華夷訳語』の一種で、タイ系の「百夷語」の学習書)の音訳漢字に対する同様の研究と比較した結果、両者がそれぞれよく似た対応関係を示すことを明らかにした。更に、現代の雲南省のタイ族の言語に借用された漢語の声調との対応関係とも一脈通じるところがあることを指摘して、明代以来、雲南省からタイ・ラオス・ビルマの隣接地域に話される広範なタイ系の諸言語において、漢語の声調を取り入れる共通の方式が存在し、現在に至っている可能性を示した。『八百館訳語』にはすでに泉井久之助(1953)などの先行研究があるが、この研究発表では、『八百館訳語』の音訳漢字の声調に着目して、それが原音のいかなる声調と対応しているかを詳細に示した点に新規性があり、特に中国においては同様の研究がほとんど行われていない。

### (3) 『華夷訳語』全般に対する研究。

研究代表者は、平成 27 年 5 月 22 日に京都府京都市の大谷大学で開催された「大谷大学博物館所蔵『華夷訳語』出版記念国際シンポジウム」に出席し、「日本における華夷訳語研究の現状」と題する講演を行った。講演においては、まず『華夷訳語』の種類について述べ、この文献が中国を中心とする東北・東南アジア(及び、一部西アジア)の広範な地域の主要な言語をほとんど網羅した言語学習叢書であることを示した。次に、日本における『華夷訳語』の研究史を、戦前、1940 年代から 1960 年代、1960 年代から 1980 年代、1990 年代から現在までの時期に分けて論じ、我が国におけるこの膨大な文献に対する研究がまず資料の性質に基づいた分類から始まり、次いで東洋学者や言語学者による校勘、語釈がなされ、戦後は西田龍雄『華夷訳語研究叢書』を代表とする本格的な言語学的研究が推し進められたこと、また 1990 年以降は日本のみならず中国など各国の研究者との交流が盛んになっていることなどを報告した。そして、研究者によって甲種、乙種、丙種、丁種とそれぞれ呼ばれている『華夷訳語』の各種本に分け、我が国の代表的な研究論著を紹介し、各本の研究状況や各本に特有の研究テーマ、また甲乙丙丁種相互の連携などについて論じた。最後に、今後の課題として、音訳漢字に基づいている漢語方言の音韻体系を明らかにすること、音訳漢字の選択に作用した可能性のある音声観察以外の要素の峻別、編纂及び改訂の過程の解明、漢字で異言語の発音を表記する際に音訳者が取った工夫・方略や漢字音訳が反映する異言語音声に対する精密な音声学的検討などを指摘した。このシンポジウムには日本と中国から『華夷訳語』の研究者数十名が集まり、講演を通じて有意義な学術的交流をすることができた。

研究代表者は、平成 28 年 3 月に東京都文京区の東洋文庫に赴き、同文庫が所蔵する

『華夷訳語』の現物及びパリ・アジア協会本と呼ばれる『華夷訳語』の写真版を閲覧し、その音訳漢字のデータを得た。この文献調査によって、「乙種本」と呼ばれる『華夷訳語』が包含している九種の言語について、少なくとも一種類のバージョンの音訳漢字のデータを収集することができた。このデータは、『華夷訳語』で異言語の表記に用いられた音訳漢字一字一字について、その中古音の枠組と、それが各言語のどの音声を表記しているかの情報を含む。

(4) 『元朝秘史』の音訳漢字に対する研究。研究代表者は、平成 28 年 3 月、『東アジア伝統の継承と交流』(山口大学東アジア研究科東アジア研究叢書 3、山口大学東アジア研究科編著)の第 13 章として、論文「『元朝秘史』の音訳漢字の声調について」を執筆した。本論文は、明代初めに中国で編纂された『元朝秘史』において、モンゴル語の発音を表記するために用いられた漢字を分析し、その声調が各用例の中でどのように分布しているかを統計的手法によって明らかにしたものである。

『元朝秘史』の音訳漢字については、陳垣(1934)、服部四郎(1946)など、日中の学者による研究が早くからあり、それ以後も研究が多い。本論文においては、『元朝秘史』の音訳漢字において、同じモンゴル語音を表記するのに複数の漢字が使われている事実に着目して、漢字の声調の点から説明を試みたものであり、声調に着目したものは先行研究には見当たらない。『元朝秘史』の音訳漢字が『華夷訳語』と深い関係にあることは研究者の間で広く知られているが、研究代表者は自身の研究(更科慎一(2000)など)を通じ、『華夷訳語』の音訳漢字において、それが表記しようとする原音が語の中のどの位置にあるかにより特定の声調を持つ字があてられる傾向があることを見出しており、本論文においては『華夷訳語』と関係が深い『元朝秘史』の音訳漢字においても同様の声調選択傾向が存在するのではないかとの見通しのもとに分析を行った。その結果、『元朝秘史』においてモンゴル語を表記する漢字には一部の『華夷訳語』と共通する声調選択の傾向が存することが明らかとなった。特に、『元朝秘史』と同じくモンゴル語を表記している「甲種本」と呼ばれる『華夷訳語』の音訳漢字とは、声調選択傾向において著しい類似を示すことが認められた。

### < 引用文献 >

泉井久之助(1953)、「八百館雑字ならびに来文の解読」、京都大学文学部研究紀要第 2、1-109 頁。

陳垣(1934)、『元秘史譯音用字攷』。中央研究院歴史語言研究所專刊之十。

服部四郎(1946)、『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』。龍文書局。

更科慎一(2000)、「『高昌館訳語』音訳漢字に

おける声調選択の傾向」、『人文学報』(東京都立大学)311、35-51頁。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

更科慎一、『元朝秘史』の音訳漢字の声調について、『東アジア伝統の継承と交流』(山口大学東アジア研究科東アジア研究叢書3、山口大学東アジア研究科編著)、査読なし、2016年、pp.245-266。

〔学会発表〕(計2件)

更科慎一、日本における華夷訳語研究の現状、大谷大学博物館所蔵『華夷譯語』出版記念国際シンポジウム、2015年5月22日、大谷大学響流館3階マルチメディア演習室(京都府・京都市)。

更科慎一、關於『八百館訳語』音訳漢字の声調、“華夷訳語”与西夏文字符国際學術研討会、2013年12月7日、北京市(中国)。

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

更科 慎一 (SARASHINA, Shinichi)

山口大学・大学院東アジア研究科・准教授  
研究者番号：00379918